ていた。父も昔、日清戦争で出征し、慰問袋のありがたさをよく知っていた。父は五十歳前であったのでその頃は在郷軍人として在宅活動をしていた。兄は志願兵として満州に行った。

その頃の出征兵士の家庭は母親や年寄りが一家を支えていた。育ち盛りの子どもに少しでも食糧を確保する為に農家に大切な着物をもっていき主食や野菜などと物々交換し、その買い出し部隊は列車の中で犇（ひし）めいて帰った。ところがその頃は食糧の受理統制が厳しく一般に正規の配給以外は総てやみ物資となり見つけられると容赦なく全部取りあげられた。

それでも食べる為には、また買い出しに行くしかなかった。その非情な取り締りにみんなどれだけ恨みをもったかしれない。今日一日どうして生きてゆけばよいのかと誰れもが悩んだ。

この様に総てを閉ざされた状況下の中での毎日の生活は想像を絶するものがあり各家庭の子どもの数も多く益々窮迫していくのだった。

栄養失調により失明したり、食に不適な物で中毒死したり、家族の為に盗みをしたりした人もあったがこの様な人をみても同情してあげる余裕もなかった。

空爆と食糧難とを重視して小学校では疎開を命じたが、行く先のない人も多くあった。

また疎開先でも苦労が多くあり、危険を承知で家に舞い戻った子もあった。

私も短期間県内の親戚に寄宿した。子どもの疎開中に家に残った家族が爆死してしまい、子どもが孤児となった家庭があった……

私達より二年上の学童から学徒動員として、勤労奉仕を義務づけられ、当時の軍需工場や土木作業の現場等に授業時間を裂いてまで行かされていた。十歳をすぎたばかりの男の子は、茶色の国民服に、頭には戦闘帽を被り、足にはゲートルを巻いていたがまるで小さな兵隊さんだった。親の不安はどんなだったろうか…

女子は被服縫製工場等に行かされていた。

ある日、その工場が爆撃に遭い多くの犠牲者が出た。空爆の最中であったので、遺体は各家庭で葬送されず、近くの川原の隅に運び真昼に重油をかけて火葬したそうである。

信じられないが事実であった。家族の悲しみはどんなに深かったであ